

へ渡り、不信心の人にはやうく十島か十五島ならでは見へず、願望ある人志す所の島の動き
やうによりて吉凶をしるといふ、此事至て怪敷事に思ひ、信せざる事ながらも、知ある人に會せば、委
も違ひなき事に物語せし也、疑ふまじき埒もなき虚説とは思ひながらも、知ある人に會せば、委
敷尋とわんと思ひありしに、山形寶幢寺の客僧林山と稱せる、文學も有客僧に會せしかば、林山
の云、拙僧は常州水戸邊の産にて、先達て此怪事を承り、當國へ參り、早々大沼へ參詣して、委敷見
聞せしに、寛文年中の頃にや、山伏の曲ものありて、いろくの怪を以て大木のくりぬきを丸く
し、夫にいろくの草木を植て彼沼にうかめ、俗物をあやかせしにより、近郷の愚盲なる人々、大
ひに評判して群集をなせしより、他國へ聞へし事にて、和漢三才圖會、里人談などに顯わし、世人
のしる所となりしなり、古しへよりぞかる怪説實にありし事ならば、古き書に記し、風土記な
どには書落す事にはあらず、やふく百年以來の事跡にて、其妄説を考へ候へと有しゆへに、色
色の疑ひのはれし事なり、

〔玄同放言上〕秋田島沼

出羽國村山郡山形の奥なる大沼の浮島は置賜郡在東遊記卷五に載せたり。○中略 彼浮島なる島遊と
いふことは、未曾有の奇觀なるをつたへ聞きかたりつぎて、今はしらざるものもなければ、奥羽
に歷遊する人は、かならずいゆきて観るもの多かり、是のみならず、同國秋田郡寺内に程近き、島
沼といふ沼にもまた島遊の奇觀あり、是をば觀る者稀なるべし。○中略 犁に秋田人、茂木蕉窓來訪
せし日、余この事を告げて、そがいふまにく興繼して畫せたり、猶傳聞の失あらん歟、蕉窓云、久
保田城より西の方なる街道を土崎湊道とす。○中略 彼島沼は、街道より東北二町許にあり、この島
沼も、その岸おのづから離れて水中を遊行し、又舊の岸に著くこと、大沼なる浮島に異ならずと
いへり。○中略 或はいふ、秋田なる島沼は近年いたく荒れて、又島遊のことなしとぞ、いまだしかる